

◆荒井類 選

《「肝煎り」は「肝入り」でもあるので》

談合と言わず肝煎りふぐ料理 川目智子

いや～、こわい一句ですね～。えっ、この句の何がこわいというんだ？ では、『大辞林』第四版より引用してご説明申し上げます。

だん ごうーがふ【談合】(名) スル〔古くは「だんこう」〕①話し合うこと。話し合い。相談。「集まって一する」②競争入札の際に、複数の入札参加者が前もって相談し、入札価格や落札者などを協定しておくこと。

きも いり【肝入(り)・肝煎】①あれこれ世話や斡旋をすること。また、その人。取りもち。②③④略。

「談合②」(違法だ!)をしているのだけれど、それを「肝煎り」(世話係)がいるだけといっている。というのが、この句の「談合と言わず肝煎り」ですね。ここで、『大辞林』第四版の見出し(漢字)にご注目いただくと、この句の秘めるこわさがおわかりいただけるだろう。「肝煎」ではなく「肝入(り)」を採用してみよう。〈談合と言わず肝入りふぐ料理〉となる。ふぐの毒は、フグ類の卵巣や肝臓などに含まれるから、「肝入りふぐ料理」とは、まさに「鉄砲(当たれば死ぬ)」である。談合批判をしているだけの句かと思ったら、「ふぐ料理」を取り合わせることにより、一挙に怖い一句となった。現代性と諧謔性をあわせもつ句である。

《「当たり前」が生む滑稽》

日の丸も畳めば布よ十二月 石寒太

「炎環」の主宰・石寒太の句である。「当たり前」のことを言っているだけだが、滑稽感が漂う。

十二月といえば「開戦日」のある月であり、そこに「日の丸」とくれば……だが、石寒太は左翼でもないし……といっても、このぐらいの「反戦」は平均的日本人の「当たり前」か。

ところで〈星条旗も畳めば布よ十二月〉というのは可能か。

星条旗は畳んでも「布」にはならない。それは畳めば「赤い布」になるのだ。

日の丸は「畳めば布」になる。というのは、日の丸は「畳めば布」＝「畳めば白い布」になるからだ。ただ単に「布」といったら、「赤い布」ではなく「白い布」でございましょう。 出典：「炎環」二〇二二年三月号

《開戦時には手も足もあったが……》

手も足もあって十二月八日かな 池田澄子

池田澄子の第七句集『此处』よりの一句。掲句に接し〈手と足をもいだ丸太にしてかへし〉という、鶴彬（つるあきら）の（反戦）川柳を思い浮かべた。

十二月八日は、もちろん、太平洋戦争（大東亜戦争とおっしゃりたいむきは、そのように読み替えてください）の開戦の日である。「帝国陸海軍は本八日未明、西太平洋においてアメリカ、イギリス軍と戦闘状態に入れり。」という大本営発表をリアルタイムにあるいは歴史的記録として、お聞きになった方も多かろう。その開戦の日には「手も足もあった」というのである。そして、鶴彬の川柳へとつづいていくということなのだろう。

《千代女の「もらひ水」の句のように……》

右ブーツに山鼠冬眠春まで貸す 信太蓬

左右あるブーツの右に「山鼠＝やまね」が冬眠しているというのである。そして、作者は「右ブーツ」を「春まで貸す」というやさしさを示す。

多くの読者が〈朝顔につるべ取られてもらひ水加賀千代女〉を連想したことだろう。「もらひ水」の句と同じような話である。

ここでちょっと脱線。千代女の直筆に「朝顔や」と書かれているものがあることから、本場の金沢では〈朝顔やつるべ取られてもらひ水 千代女〉という「や」の方を奨励しているそうである。（「に」から「や」に推敲）。

さて、「山鼠＝やまね」に戻る。次の引用は、『大辞林』第四版の〈やまね【山鼠】〉の項からのものだ。〈齧歯（げっし）目ヤマネ科の一種。日本特産でネズミに似た小獣。頭胴長約8センチメートル，尾長約5センチメートル。体はコルク色で，背の中央に一本の黒茶色の縦縞がある。森林にすみ，夜行性で，果

実・種子・昆虫などを食べる。寒くなると冬眠する。本州以南に分布。冬眠鼠。  
マリネズミ。)

山鼠は「天然記念物」だというから、天然記念物の動物が自宅に置いてある  
ブーツで冬眠！ ニュースになりそうである。

掲句に戻る。頭胴長約8センチメートルの鼠のようなものが自分のブーツで  
冬眠している。せっかく眠っているんだから、春まで寝かしておいてやろう。  
そう考えたやさしい作者。そのやさしさが、人々を微笑ませる。こういうのも  
滑稽句の一種。

出典：「澤」2020

年2月号